

主題	機械浴ゼロの実現に向けた、個浴浴槽導入の取り組み効果と課題
副題	当たり前の生活を目指して
機械浴ゼロ 個浴	

研究期間	25ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 駒場苑
発表者：宮艸一裕（みやくさかずひろ）		アドバイザー：坂野悠己（さかのゆうき）	
共同研究者：山木謙太郎（やまきけんたろう）			

電 話	03-3485-9823	メール	komabaen@coda.ocn.ne.jp
FAX	03-3485-9825	URL	http://komaba.mdn.ne.jp/

今回発表の事業所やサービスの紹介	所在地：〒153-8516 東京都目黒区大橋2-19-1 定員：57名 開設：平成元年12月1日 当施設では“隣人愛”という法人理念から、「寝かせきりゼロ」「オムツゼロ」「機械浴ゼロ」「誤嚥性肺炎ゼロ」「脱水ゼロ」「身体拘束ゼロ」「下剤、精神安定剤ゼロ」という“七つのゼロ”をケア方針に掲げ、介護の質の向上に取り組んでいる。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

当施設の開設時のお風呂は、大浴場形式のお風呂（以下、一般浴）とリフト浴一台、機械浴二台だった。当初は一般浴の利用者が多数を占めていたが、個浴導入直前は全利用者50名中、一般浴がわずか3名、リフト浴が19名、機械浴が28名だった。入浴は一人週2回で、入浴時間は日中午後の3時間のみ、特に一般浴とリフト浴は同時進行で、3時間で20数名が入浴されていた。職員は時間に追われながら介助せざるを得ず、心理的、身体的負担の原因になっていた。利用者にとっても、リフト浴が一台しかないために、ゆっくり入浴できず、衣服を脱いだまま待たされることも多かった。また、リフト浴の人数が多く、混むという理由から、座位がとれるにも関わらず機械浴で入っている利用者もいた。ストレッチャーの老朽化も激しく、事故の危険も高くなりつつあった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

当施設では、利用者に今までの生活習慣を尊重し、その人らしい当たり前の生活を送っていただくことを目指している。入浴についても、一般家庭のような普通の浴槽（個浴）で時間を気にせずゆっくり楽しんでもらいたい、ヒノキの香りに包まれて温泉気分を味わってほしい、機械浴やリフト浴で入浴していた方にも湯船につかる気持ち良さを感じてほしいという思いから、浴室の改修工事を行うこととなった。

それは同時に、“利用者全員の機械浴から個浴への移行の取り組み、機械浴ゼロへの挑戦のスタート”となった。

《3. 具体的な取り組みの内容》

○対象者：特養全利用者57名

○取組期間：平成23年5月～平成25年6月

○取組んだ職員数や構成：介護主任1名、フロアリーダー3名、介護職員20名（入浴委員3名）

○必要とした道具や費用

木椅子、入浴チェアー、リクライニング入浴チェアー、取り外し可能な手すり、スロープ、足台、一人風呂・二、三人風呂、各430万円

◎平成23年5月：一般浴とリフト浴の改修工事
大浴場の湯船を埋め、ヒノキの一人浴槽を三台設置、フロア毎に一台の浴槽を使用することとした。工期中の入浴は、当施設のデイサービスに先行導入されていた個浴を使用した。この間は必ず介護主任が付き添い、実践の中で職員への技術指導、不安の解消を行った。

◎同月：個浴運用開始・・・入浴を午前、午後とも行うこととし、一日の入浴人数も、各フロア午前2名、午後4名と減らし、職員がマンツーマンで介助することにより入浴時間にゆとりを作った。それにともない勤務シフトの変更も行った。個浴が難しい方については、介護主任、リーダー、入浴委員を中心に、利用者一人ひとりに適した椅子や用具を用いての安全、安心な入浴方法を検討し、職員への周知、習熟を図った。

◎平成25年5月：機械浴撤去工事、6月：運用開始・・・機械浴二台を撤去し、ヒノキの二、三人浴槽を設置、その横には、浴槽のへりと同じ高さのヒノキの洗身台を設置し、姿勢が安定せず横になりながらでないと洗身できない利用者も安全に、安心して入浴できるように工夫した。導入後一週間は前回同様介護主任が付き添い、技術の習熟、不安の解消にあたった。職員も二年前から個浴を経験し、全員が基本技術をマスターしており、スムーズに取り組みを進めることができた。また、施設全体が“機械浴ゼロ”の目標を共有しており、入浴介助補助のために新たに人員配置をするなど、間接職と一体的に取り組みが行われたことも順調な移行ができた理由の一つであった。

《4. 取り組みの結果と考察》

取り組みを続けた結果、54名中46名が個浴へ移行できた。二、三人浴槽を設置してからは、機械浴だった方も移行でき、利用者全員、個浴への移行が実現した。時間を気にせず入浴できるようになり、利用者からは、「いいお湯ね」「気持ちいいわ～」「もうちょっと入っていい？」という声が聞かれるようになった。さらに、今まで介助が必要だった利用者に、自分で洗身したり、浴槽に入ったりするなどの嬉しい変化がみられた。

《5. まとめ、結論》

一人でゆっくり湯船につかるという、今までの生活習慣を尊重した入浴ケアができるようになったことで、利用者のADLの向上、満足度と笑顔の増加を感じることができた。今後もさまざまなツールを活用し、浴室や脱衣所の環境を充実させ、入浴の楽しみやリラクゼーションの向上を目指していくことが求められる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、利用者ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

三好春樹、金田由美子、山田穰、西間元章 2008年 「新しい介護学 生活づくりの入浴ケア」 雲母書房

《8. 提案と発信》

今回の取り組みは、まだ一握りの施設でしか進んでいないが、職員全体で目標を共有し、安全、安心な介助方法を考え実践することで、“機械浴ゼロ”は達成できる。機械浴に頼らず湯船につかり入浴できること、その人らしい当たり前の生活を目指すことが広がり、入浴ケアの質の向上につながることを願っている。

【メモ欄】